2015年08月31日

行動について

小山照夫

1. はじめに

動物はその欲望達成のために行動する存在である[1]。しかし、すべての行動が欲望達成に結びつくわけではない。むしろその置かれた状況に応じて適切な行動と適切でない行動とが常に存在して、適切な行動を正しく選択することが欲望達成の上で重要な問題となる。

動物の成長過程を見ていると分かるが、特に哺乳類程度に発達した身体構造を持つ動物では、誕生直後から欲望達成のための行動が適切にできるわけではない。動物は成長とともに適切な行動をとれるようになって行くが、これは学習の効果であると考えられる。ここで問題となるのは、行動をどのようなものとして理解すればよいのか、またその学習プロセスはどのようなものなのかである。ここでは行動というもの自体について検討する必要があると思われる。

言語の使用という形での行動については既に一部考察を述べてきた[2]。しかし、実際の人間の行動は言語的な行動に限られるわけではない。以下ではより広い意味での行動について、それがどのようなものであると理解すれば良いのか、それはどのように欲望達成に関わってくるのか、またその学習とはどのようなものなのかについて考察する。

2. 行動とは

人間が行動するとはどのようなことであるかは、一見自明であるように思われる。しかし実際にはそれほど単純なものでもない。

2.1. 自然言語動詞と行動

行動について、動作主の存在が想定される自然言語の動詞はすべて行動とみなしてよいとする考え方はあろう。しかし、通常の自然言語記述では多くの場合一つの動詞は単純な独立した事象ではなく、むしろ複雑に関係しあういくつかの事象を含んでいる。

例えば「殺す」という動詞の場合、それはナイフを強く握り締め、それを相手の身体に突き刺すという一連の身体活動を含む場合があるかもしれないが、実際にはそれだけで「殺す」という事象がすべて完結したとは言えない。

ここで「殺す」という動詞は、刺された相手が死に至るという事象を含んでいるのであり、動作主の一連の身体活動の結果生じた傷が、傷を負った相手の身体に対していくつかの生理的変化をもたらす結果として、その主要臓器の機能を害することにより、生命が維持できなくなる状況を引き起こしてはじめて成立するものである。

また、別の例では、「購入する」という動詞では、売り手／買い手相互に必要とされる身体動作の組み合わせに加えて、貨幣など交換価値を担保する記号の移転とそれに伴う物品の所有権移動など、様々な社会的な規約が関連してくることが事態をさらに複雑なものとしている。

ここでの要点は、一般に自然言語で用いられている動詞というものは、多くの場合複雑な複合した事象の組み合わせを示唆しているということである。しかも、これは言語記述の持つ必然的な性質であると言っても良い。

自然言語によって記述できるのは、一般にごく限定された情報であり、少ない記述の中で問題とする事態の要点を示すのは簡単ではない。そこで動詞に複数の観点から見た事態の要点を総合的に記述させながら、関連する背景をできる限り記述の中に組み込むことが必要となる。このため、動詞の持つ内容は必然的に複雑化していくこととなる。

しかし一方、複合した自然言語動詞レベルで行動を捉えるとするなら、問題を必要以上に複雑化し、その本質の解明を困難にするおそれはないのだろうか。あるいは、複合した事態は行動の解析や、行動の学習という問題を取り扱う上で適切な記述レベルになっていると言えるのだろうか。

2.2. 第一義的行動としての身体活動

まず第一に、行動というものはどのようなものであっても、すべて行為者の身体的活動を含んでいる。身体的活動のないところに行動はありえないと言っても良い。一方で身体活動は行為者の内部あるいは外部に対して一定の変化をもたらすという効果を持つ。とくに活動が身体外部に何らかの効果を持つとき、その効果を活動の帰結と呼ぶことにしよう。自然言語動詞は、多くの場合この身体活動とその帰結とを一つの現象としてまとめたものとも考えられる。とするならば、行動に関する様々な問題の解明を進める上での一つの方法として、身体活動を第一義的な行動と考え、その帰結とは一応は切り離されたものとして扱うことが考えられよう。

ところで、身体活動には様々なものがあると考えられるのだが、それらのすべてを第一義的な行動と考えて良いものだろうか。行動というものを、欲望達成に効果のある帰結を期待できる身体活動とするなら、正常な身体活動はある意味ですべて行動と考えることも可能であろう。しかし、例えば消化器官などの内臓活動を初めとする不随意活動は、確かに身体状態を正常範囲に留め、欲望達成のための必要条件を担保す

るという意味で欲望達成に効果があると言えるにしても、これをいわゆる行動とするのは一般的ではないと思われる。
　またこれとは別に、無意識の行動というものの中にも、行動としてどのように意味付けるか不明確なものもありうる。もちろんこれらの中には行動そのものとして意味があるが実際の実行時にはほとんど意識されないものもあって、例えば習慣的行動などがそれにあたる。このような行動は、経験的にその実行が有効なものであることが分かっているもので、特別な事態が生じていない限りは、決まった手順で一連の動作を行うことが、日常の様々な活動を行う上で役立つと説明できるものである。このような形での無意識の活動を行動とみなすことには特別な問題があるとは考えられない。
　しかし、一方で無意識行動の中には、なんのためにそのような行動を起こしたのか、またその行動は何の役に立つのかを、行為者自身も言葉では説明できないものもありうる。この場合には行動が行為者の欲望達成にどのような関係を持つのか、背景が言語化されていない以上は理解することがしばしば困難である。
　以下ではとりあえず事後的にでも、身体活動の背景とその帰結が言語的に説明できる身体活動を第一義的行動として考えることとする。

2.3.身体活動の分類

　ところで第一義的行動としての身体活動には、どのようなものがあり、どのように分類しておくことが適切であろうか。まず第一に、身体活動には行為者の身体外部に何らかの影響を及ぼす可能性を持つ活動と、そのような影響可能性を持たないものとがあると考えることができる。
　身体活動のうち、感覚、認識、推論などは、それだけで完結している限りは、活動を行う身体の外部に影響を及ぼす可能性を持たないと言ってよい。一方で随意筋の作用による身体活動は、原則としてすべて、外部に影響を及ぼす可能性を持つものであると言える。後者をさらに、物理的な効果を主とするものと、他の動物、特に同種の個体である他者への情報発信を主とするものとに分類することができるであろう。問題はこれらの身体活動としての行動がどのように欲望達成に結びつくのかである。
　最初に述べたように、欲望達成のためにはどのような行動であっても等価というわけではなく、適切な行動を選択することが必要となる。したがって適切な行動とはどのようなもので、それはいかにして実行できるかを明かにする必要がある。ここでは行動に関する基本的な理解と、適切な行動がどのようなものであるかの学習とが必要になると考えられる。

3. 行動の構造

　行動に関して、もし何も行動を起こさなくても欲望が達成できるのなら、行動をおこすこと自体が無意味となるであろう。だから行動の要点は、行動を起こすことにより、行動を起こさなかった場合と比較してより欲望達成の可能性が高まるという点にある。ここでは、行動により欲望達成のための外部状況が変化する可能性がなければならない。このことからここで問題となる行動は、少なくとも最終的には外部に影響を及ぼす可能性を持つもの、すなわち身体の随意筋活動を含むものでなければならないことになる。
　一方で、外部効果のある身体活動のうち、ある時点でどのような活動が可能であり、それらのうちでどれが最も望ましいものであるかを判断し、選択する必要もある。この判断は、外部的な活動ではなく、内部的な活動であると考えられる。ここでは、ある時点で特定の行動をする方が良いのか、あるいはしない方が良いのかという判断が必要となる。この判断はどのようにして可能になるのであろうか。

3.1.行動の内部活動的側面

　まず第一に、適切な行動が選択できるためには、行為者の置かれた状況下でどのような身体活動が可能であるかを判断できなければならない。次に、それぞれの活動を実際に行った場合について、結果としてどのような状況が生じると期待できるかを推定できなければならない。最後に、推定された状況が、主要な欲望のそれぞれに対してどのような効果を持つかを判定し、その価値を総合的に評価することができなければならない。
　これらは、感覚、認識、推論といった、行為者の内部的活動、あるいは情報処理活動として実現されるであろう。つまり、まず最初に感覚器から得られる情報を解釈して、実際の周囲の状況を認識し、可能と思われる身体活動を列挙することができなければならない。次に、仮に可能な身体活動のそれぞれをとった場合、その帰結として事態の推移がどのように変化するか推定できる必要があり、最後に帰結として生じる事態が各欲望に対してどのような効果を持ち、それが総合的に見て好ましいかどうかを評価できる必要がある。
　単一の欲望に関する限り、それが特定の状況下で達成できるかどうかは通常明らかであり、評価の問題は大きくないように思われるかもしれない。しかし身体活動の帰結は特定の欲望に対しては達成可能性を増大させるかもしれないが、一方で他の欲望に対しては達成可能性を失わせるかもしれない。ここでは欲望の間の優先関係を考慮した上で、最も好ましい帰結が期待できるのはどの行動であるのかを判定する必要がある。
　内部的な情報処理活動では、意識活動としての言語的処理が大きな役割を果たしていると考えられるが、一方で明確な形での解明は困難であるが、感覚記憶に基づく非言語処理も一定の影響を持っていると考えられる[2]。

3.2.物理的側面と社会的側面

　行為者を取り巻く状況には、純粋に物理的なものと社会的なものとがある。認識と将来予測の問題は、純粋に物理的な事象と社会的な事象とで相当程度異なる性格を持っているように思われる。例えば歩くことによって自身の位置が変化するとか、十分固くて質量のある物体をガラス板に投げつければガラス板は割れるといった純粋物理的事象は、条件さえ整えれば高い再現性を持つし、なによりもその背景に信頼できる

物理法則が存在していて、規則的な現象再現を保証していると信じることができる。
　これに対して社会的な現象ははるかに複雑である。これは、相互に関係する個体の間の、主たる社会的位置関係の及ぼす効果が、職場での関係なのか、それともスポーツクラブでの関係なのかなど、そもそも文脈に応じて変化することにもよるし、また、相互に相手がどのような欲望体系を持ち、欲望の間の優先関係をどのように判断するかについて、外部から直接確認する手段が存在しないことにもよると考えられる。さらに言うなら、無意識の欲望に関しては、本人自身が必ずしもその存在や、他の欲望との関係を明確に把握していない場合も考えられる。
　これらの要因の関係してくる社会的事象の認識と予測が、単なる物理現象と比較してはるかに複雑な問題となるのは当然であると言えよう。
　もう一つの特徴として、社会的な状況変化は、物理的な活動、たとえば他人の持ち物を壊すといった活動によっても起こり得るが、むしろ情報的な活動によって大きな変化が起こりうるという側面もある。
　挨拶する、雑談する、約束する、非難する、褒めるなどの言語的／情報的行為や、ウィンクする、微笑みかけるなどの非言語的情報行動は、いずれも人間個体間の社会的関係を変化させる要因になりうる。さらには、握手する、抱擁するなどの、物理的効果を含む活動であっても、実質は情報的意味合いの強いものも存在する。情報的行為の中では、一般に言語的活動が注目されるが、実際には身振りや表情、口調などといった、言語外情報も大きな役割を果たしている。
　社会的状況の下では物理的行動と情報的行動とを様々に組み合わせることにより、相互の社会的位置の確認を行うとともに、位置関係に基づく権利・義務関係の様々な設定が行われる結果、相互に欲望達成に効果があると考えられる行動を相手にとらせようとする形で社会的行動が実行されていくと考えられる。

3.3.知識の必要性と学習

　これまでに述べてきた状況の把握と予測、状況に応じて適切な行動をとるなどの能力はどこから来るのかといえば、それは基本的には行為者の持つ知識に基づいており、さらにこの知識のほとんどは学習によって習得されると考えられる。
　学習にあたっては成功事例と失敗事例とが必要となるが、認識と予測の場合には実際に特定の見通しの下に活動を行い、その帰結を確認することによって、活動が成功したのか失敗したのかが明かになる。
　一方で欲望達成の問題に関しての失敗事例とは、それは期待した状況変化が起ったのだが、あらかじめ想定した満足をもたらさないという形で現れるであろう。

3.3.1.認識と予測に関する学習

　活動の結果期待する状況変化が生じない場合、それは現状認識が誤っていたか、あるいは推論規則が誤っていたかのいずれかであると考えられる。純粋に物理的現象の場合、問題は比較的単純であると考えてよい。現状認識が失敗するのは、錯覚を起こしているか、感覚に関する偽像が生じている可能性が高く、これらの現象が起きる可能性を考慮した現状認識を行えば良い。予測については、現象としての分類が適切であったかどうかを検討し、場合によっては現象クラスの統合や分割を行いながら、従来の経験と新しい現象を統合できる推論規則を確立することになるであろう。
　物理的事象に比較して、社会的事象はより複雑であり、確定的な結論を得るのが困難な問題である。例えば単に相互の社会的な位置関係と言っても、仕事をしている時とレジャーに出かけるときなど、状況としての文脈が異なれば有効に機能する社会的位置関係も変わってくるであろう。また、社会的状況では働きかけたい相手の気分がどのようなものであるかによっても、言葉や身振りによる働きかけの効果が変わってくることも考えられる。さらに、提示された情報や物理行動に応じて実際に相手がこちらの希望する行動をとるかどうかは、行為という形でこちらが発信する情報を、その時の状況の下でどのように相手がその欲望と関連づけるかにかかっている。
　さらに言えば、相手の欲望や知識など、その内部状態に関しては、確実な形で直接把握する手段は存在せず、表情や身振りなどのいくつかの兆候から推定する他はないという問題もある。このような社会的状況の中で、状況認識や将来予測がどのように誤っており、どうすれば誤りを修正できるかが問題となる。
　この問題は極めて複雑に見えるが、実際には多くの人間では日常生活に支障がない程度には学習が可能である。この背景には、そもそも人間が社会的動物として発展してきた過程での淘汰の結果があると考えられるであろう。また、一方で身体構造の基本的類似性から、特定の感情状態にある時の筋肉の動きについて、自身の経験から他者の状況を推定できることや、同一社会の中では基本的な欲望もまた、かなりの程度共通していることも学習可能性に関係していると言えるであろう。人間は自分自身の状態を参照しながら、同様の状況にあると推定される他者の状況についても推定が可能であり、その範囲内で状況把握や将来推定の方式を変更することによって有効な学習を可能にしているのではないだろうか。

3.3.2.帰結の満足度に関する学習

　事態が予測通り推移したにもかかわらず、結果が十分な満足を与えなかった場合として、期待通りの享楽が得られなかった場合と、欲望達成の副作用として生じた結果が予想に反して他の欲望達成を妨害する結果、行為者に不快感をもたらす場合とが考えられる。享楽について言えば、初めて達成された欲望では、達成された状態を享楽する方法を十分に知らない場合と、実際に生じた状況が本来行動者に享楽を与えるものではなかった場合とが考えられる。例えば職場である肩書きを獲得するような欲望では、多くの場合欲望達成はその件に関しては本人にとって初めの経験てであると考えられるが、肩書きの存在がどのような新しい行動を許されるものとするのかについての誤解があるなら、その位置を享楽することは難しいかもしれない。あるいは達成された位置によって許されるようになった行動が、本人にとってまったく魅力的ではない場合も考えられる。
　一方で既に何度か達成した欲望では、予想される享楽もまたおよそは予測できるものであるにも関わらず、十分な満足が得られない場合がありうる。これは状況によっては享楽の発動その物が抑制されるか、あ

るいは副作用としての他の欲望に対する阻害効果が生じるためと考えられるのではあるまいか。
　いずれにせよ、ここで学習されるのは、欲望達成結果としての社会的位置、あるいはそこで許されるようになる行動を享楽する方法を発見するか、あるいは状況によっては欲望達成その物が不適切になるのでそのような行動をとってはならないという判断になるであろう。

4. 行動の個人性と社会性

4.1. 学習の個人性

　これまでに有効な行動をとるための学習について述べてきたが、結局の所この学習は行動者の欲望が達成できるかどうかが学習の基準となる。認識と予測は欲望の達成できる将来予想としての物語を構築するためのものであるし、外部への働きかけは欲望が達成できる状況を作り出すためのものであると言える。結果として学習された内容は、個人に特有のものとならざるを得ないと思われる。
　しかし一方で、学習結果は同時に一面では社会的なものでもある。群れを作る動物の場合、社会的な位置関係はその個体に群れの中で許される行動の範囲を決定する効果を持つしたがって動物本来の欲望を達成するための条件として、より広範囲な行動が許される社会的位置を獲得することが重要な欲望となる。この欲望を達成しようとするなら、そのための行動は社会的なものとならざるを得ない。
　まとめて述べるなら、人間は個人的に行動しながら、結果として社会的な行動を取ることになっていると言えるであろう。

4.2.私的言語は成立するか

　ところで言語使用も一つの行動であるとするなら、このことからは言語使用は個人的なものということになる。ウィトゲンシュタインは、私的言語は存在し得ないと主張したが、これまでの考察によれば言語はそれが使用される時にはすべてその使用者に所属する私的言語であって、ただ、言語使用者は言語を社会的に利用することもできるというほうがより適切ではなかろうか。
　もちろん、例えば日本語など、同一言語を話す集団の中では、基本的な言語記号や文法構造は共通している。その結果、同一の言語を使用する集団では、おおまかには共通の言語を使用しているように見えるかもしれない。
　しかしより詳細に見るなら、集団の中にも、到底標準的とは言えない言語使用を行う個体が常に存在していて、例えば特定の言語記号を通常は指示しないはずの対象への指示として利用したり、特定の言い回しで破格な文法構造を採用することがある。しかし、この様な個体であっても、実際には問題が生じない程度に社会的に行動していることが多い。クワインやデイヴィドソンは、この様な場合には寛容の原則にしたがう「翻訳」が行われるとするのだが、「翻訳」を必要とする二つの言語は果たして同じものと言えるのだろうか。
　また、同一言語を話すと考えられる集団は、実は一様ではなく、そこにはいくつかの部分集団が存在していて、年代や職種など個体が属する集団によって使われる語彙やその指示対象が大きく異なることも日常経験する所である。さらに個体としての人間は通常は複数の部分集団に帰属していて、それぞれの集団内で使用する言葉を使い分けてもいる。
　一方、言語の習得／学習過程を考えてみても、個体はその置かれた社会的位置でそれぞれ有限の、異なる学習データ集合から言語の使用法を獲得していくわけだが、この様な状況の下で二人の個体が同一の言語を学習するという事態ははたして起こりうるのだろうか。
　さらに、外部への言語使用が有効に機能するためには、言語使用者としての個体が置かれた社会的位置が問題となるのだが、社会的位置というものはすべて排他的なものであり、特定の位置を占めることのできる個体はただ一つだけである。このことを考えるなら、二つの個体が同一の言語使用を行うことで、同一の社会的効果をあげるというのは、そもそも不可能ではないだろうか。
　一つ例を考えてみよう。A 氏はある商品を特定の価格で売りたいと考えている一方で、B 氏および C 氏はその商品をできるだけ安価に購入したいと考えているとする。B 氏および C 氏は A 氏に対して値引きの交渉をすることになるだろうが、この時二人は異なる言語使用によって交渉を行おうとすることになるのではないのだろうか。また、結果として例えば B 氏は値引き交渉に成功し、C 氏は失敗した場合、もし C 氏が B 氏と同じ言語使用を行って交渉していたら同様の値引きに成功したと言えるのだろうか。
　さらにこのばあい、B 氏の方がより完全に近い言語使用を行っているとも言いきれないという問題もある。ここで A 氏とは別の D 氏も別の商品を売りたいと考えており、B 氏、C 氏がいずれもその商品を購入すべく値引き交渉を行ったとして、今回は C 氏の方が首尾良く交渉に成功し B 氏は失敗するという可能性は常に存在する。ここで、B 氏の使用する言語と C 氏の使用する言語は果たして同一と言えるのだろうか。
　そもそもウィトゲンシュタイン自体、「言語の意味はその使用である」と言い、あるいはゲームの途中で規則が変わっていく言語ゲームというものにも言及しているわけであるが、異なった社会的位置にある二つの個体が同一の言語使用を行うとか、変化していく規則がそれでもやはり社会全体の言語規則であるということが言えるのだろうか。
　これらの点を考えるなら、人間は社会から受け取る基本的な語彙や文法に基づいて私的言語の使用を学習する結果、概略においては非常によく似た言語使用を行うのだが、一方でその言語を社会的に使用する時には個々の立場が優先される結果、私的な言語使用を学習すると考えるのが自然ではないだろうか。

参考文献：
1.言語と人間、小山照夫、http://research.nii.ac.jp/~koyama/lang/pdf/lang.pdf、2010
2.言葉と行動、小山照夫、http://research.nii.ac.jp/~koyama/lang/pdf/speak.pdf、2014